

51. 幼児の促音の聴覚弁別に関する基礎的研究： ことばの教室に通う児童の2事例

○金子義信 岡崎恵子 飯高京子 荒井隆行
上智大学

ことばの教室に通級しており、言語音の弁別、聴き取りに困難を示している児童2名に対し、促音のカテゴリ知覚課題・文字の選択課題・無意味音節復唱課題を行った結果を示す。

【材料・手続き】カテゴリ知覚の調査では、無意味音節/aba/・/apa/を用い、その子音部分の閉鎖時間を50msから15msずつ延長し、最大260msの15段階に分けた。各刺激音を聞かせ、促音の有無を判断させた。文字の読み課題については促音を含む単語（らっぱ）、含まない単語（つみき）を5語ずつ使用した。無意味音節の復唱には4～6モーラ（原ほか、2001）を使用した。

【結果】①A児：男児（CA12：11）、WISC-R全IQ91（言語性IQ80、動作性IQ105）、語彙不足、聞き間違いが多いなどの特徴がみられる。促音の聴覚弁別課題は健常児の結果とは一致せず、子音の閉鎖部分の長短に関わらず、判断は一定でなかった。無意味音節復唱課題は4モーラまでしか復唱可能ではなかった。促音を含む文字単語の読み課題については、すべてが促音を抜いてしまう誤りだった。一方、書字については、促音を含む単語についても、すべて正しく書くことができた。②B児：男児（CA10：11、VA7：10）、音節の分解・抽出の得点が低かった。促音の聴覚弁別課題では判断が一定しなかった。6モーラ復唱可能なものもあったが、音の置換などがみられた。促音を含む文字の読み課題は全問正解だった。

【考察とまとめ】促音のカテゴリ知覚課題は、両者ともその判断が不安定であった。また、閉鎖時間を延長しても促音の入った無意味音節と判断しなかった。このことは閉鎖部分の時間延長だけでは、聴覚弁別に困難を抱える子どもには促音を習得させる効果がない可能性が示唆された。音声の弁別に問題があっても促音のカテゴリ知覚と文字の読み書き能力は、必ずしも一致せず、優位なモダリティの活用や多感覚モダリティについての検討がさらに必要であることが改めて示された。